
はちみつ色の姫

紅このは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はちみつ色の姫

【Nコード】

N2783Q

【作者名】

紅このは

【あらすじ】

幼い頃に捨てられ、聖獣の内の一体、デューローに育てられたリユーシャ。

彼女はアルファン王国の正妃の娘、つまり姫であり、魔技人^{マギビト}とよばれる民の長の直系でもあった。

ただ平穏のみを望む少女は、しかし、戦乱へと引き込まれてゆく――。

※「神々の箱庭」シリーズ第二作目。世界観が違うので一作目の

「レーゼの神」を読まなくてもわかると思います。

用語

◇アルファン王国◇

大陸一の大国。二百年前は今の五分の一もない小国だった。

◇アルファン王家◇

継承権は性別、生まれた順に関係なく平等に与えられる。王を決めるのは聖獣で、聖獣に選ばなければ王位を継ぐ事ができない。

◇魔技人^{マジビト}◇

魔技と呼ばれる術を使う民。現在アルファン王国のある地に、古代から住んでいた先住民。数百年前にアルファン王家と盟約を交わし、監視者となる。立場的には中立。

◇魔技^{マジ}◇

魔法、魔術、魔導の総称。

◇魔法◇

魔技のうち、補助的な役割をするもの。結界や治癒術など。魔法を使用する者を魔法師と言う。また、魔法石に力を注ぐのも魔法師。

◇魔術◇

魔技のうち、攻撃的なもの。火、水、風、土、光、闇の六つの属性がある。攻撃に特化してはいるが、攻撃のみに使用するわけではない。魔術を使用する者を魔術師と言う。

◇魔導◇

魔導師の使う魔技の名称。

◇魔導師◇

魔法と魔術の双方を使用する魔技人。魔法と魔術は魔力の質や操り方のコツが違うため、ほとんど伝説の存在となっている。魔導師である時点で魔力もそれを操る技術も桁違いであるため、例外なく最上級魔導師である。

◇魔力^{マナ}◇

万物に宿っている力。魔技人はこれを操る技術を本能で理解しており、また、宿る魔力の量も普通の人間よりも多い。小さな草花や石でさえ、例外なく持っている。

◇魔法石◇

魔法師が魔力を注いだもの。魔技を使う事が出来ない人間でもこれを使用する事で、簡単な魔技なら行使できる。街の結界や、街灯などに使用される。元はただの水晶。しばらくすると魔力が減るため、補充しなければならない。上級以上の魔法師でなければ注げない。

◇聖獣◇

アルファン王国に四体いると言われている魔獣の長。彼らの住処を聖域と定め、荒らさない事を条件に外敵からの（ある程度の）守護と魔獣の活動の抑制を約束している。デューロー、ペガサス、カロット、ドラゴンの王。数百年前に交わした盟約により、選定者の役目を担っている。

◇聖域◇

聖獣の住処。“ユーラテの森” “リシヤスの森” “ロージャ山” “ルドラ山”の四つ。王族ですら王位継承の選定の時以外は立ち入る事ができない。

登場人物

◆リユーシャ◆16歳

“ユーラテの森”で聖獣、デュローに育てられた少女。十年前、母親に捨てられた。最上級魔導師。魔技は独学。他に礼儀作法、一般常識などをレゼルに仕込まれた。リユーシャ・セナ・アルファンと彫られた、母親の肖像画入りのロケットを持っている。アルファン王家の正妃の姫。母親は魔技人の長の直系で、三年前に亡くなった。普段は髪を幻術で黒くし、ネルシャという偽名を使っている。

（聖獣）

◆レゼル◆

デュロー。聖域“ユーラテの森”に住む。銀の大きな狼に鋭い角、白い羽の姿をしている。青年の姿の時は銀の髪、金の目。過保護すぎるほどリユーシャを大切に思っている。お茶やそれに合う食べ物が好き。皮肉屋で毒舌。

◆セザン◆

ドラゴンの王。聖域“ルドラ山”に住む。黒い鱗で、ドラゴンの中でも一番大きく、強い。レゼルの古い友らしく、よく“ユーラテの森”に来る。リユーシャやレゼルの前では子供っぽいが、時折凍るような冷たい目をする。

◆シェーラ◆

ユニコーン。聖域“リシャスの森”に住む。きつめの美人。極度の男嫌いでもある。汚れ一つない白いたてがみが自慢。角は数年ご

とに生え替わる。

◆アジェ◆

カロット。寡黙。聖域“ロージャ山”に住む。寝ている事が多い。高い所が好き。大きめの山猫の姿。それ以外に特徴はなく、普通の動物と変わらない外見で油断を誘う。

く魔技人く

◆ロディウス◆22歳

上級魔術師。冷静だが、熱くなりやすい。リユーシャに忠誠を誓う。

くアルファス王国く

◆ウオールド◆故人

聖獣や魔技人と盟約を交わした、アルファン王国の歴史上最も有名な王。賢王と唄われ、数多くの伝説が残っている。

◆ルゼンス◆60歳

アルファス王国の現国王。息子に王位を譲らぬまま、王である事を放棄した。

◆オレック◆24歳

アルファン王国の王子。正式名はオレック・トア・アルファン。リユーシャの義兄。病弱で優しい性格。母の行動に心を痛めている。

◆アレーナ◆41歳

オレックの母。側室だが、後宮ばかりか王宮までも支配している。王妃、側室および王子や王女達の殺人の疑いがある。

◆セリア◆25歳

オレックの側近。ひそかに思いを寄せている。面倒見のいいお姉さん。

プロローグ

薄暗い森の中に、少女が一人座っていた。綺麗なドレスを着て、パンの入ったバスケットを持って。

少し場違いに見える少女は膝を抱え、ずっと前方を見つめていた。もうすぐ帰って来る。そう自分に言い聞かせて。

「遅いなあ」

ポツリとつぶやいた少女は、バスケットを持って立ち上がった。

（もしかしたら、迷子になったのかもしれない。きっとそうだ）

少女は辺りを当てもなく歩き始めた。キョロキョロと何かを探すように、草や木をかき分けて。

やがて、木の生えていない場所にたどり着いた。森から出たのだろうか、と思ったが、違うらしい。大きな木が一本生えていて、その周り是一片の花畑だ。

「うわあ……」

見た事のないかわいらしい花を眺めていた少女は、ふと木の傍で何かが動いた事に気がついた。

それは銀色の毛の塊で、額に立派な角が生えている。背中には白

いふわふわした羽が。三角の耳はピンと立ち、尾は静かに揺れた。

少女はその姿に見覚えがあった。恐る恐る近寄る。

「デュロー……さん？」

控えめに呼び掛けた。デュローというのは、この国に四体いるという聖獣の内の一体である。絵本でしか見た事はないが、ここは聖域の“ユーラテの森”だ。いてもおかしくはない。

デュローは尾をパタリ、と振った。肯定と受け取った少女は、目をキラキラと輝かせる。隣に腰を下ろし、バスケットを置いた。

「ねえ、デュローさん。セナの母様、見なかった？」

“ユーラテの森”の主だと言いつたに伝えられているデュローならば知っているかもしれないと、期待して問う。デュローは尾を二回振った。

「……そう」

少女は落胆し、デュローの体を撫で始めた。手を動かしながら、口を開く。

「今日はね、母様とピクニックに来たの。でも母様が忘れ物をしたから、ちよっと待ってってねって、すぐ帰って来るからねって」

そう言うってから、空を見上げた。太陽は西に傾き始めている。まだ六歳の少女に方角などわかるはずもないが、母が行ってしまっただけから随分経つ。もう戻って来ないだろう事は、なんとなく理解して

いた。

「……嫌いになったのかな」

少女は小さな声で言った。デュローの耳がわずかに動く。

「セナが、いらなくなったのかなあ……っ」

涙が頬を伝う。少女はデュローの体に顔をうずめた。くぐもった
嗚咽が漏れる。

「リサのおやつ、食べたから？金魚を逃がしちゃったから？兄様のお部屋、覗いたから？どうして？……わかんないよお」

デュローにすがりつくようにして泣いた。出かける前、母が妙に
優しくかった。いつも厳しい母だから、おかしいとは思っていた。でも、何よりも嬉しかったからついて来たのだ。もう両親とも兄弟とも会えないかもしれない。

少し落ち着いてくるとデュローが体を起こし、少女の前に座った。
少女はデュローの首に手を回して力を入れ、つぶやく。

「セナは、捨てられたのかな……」

それは静かにかすれた、あきらめたような声だった。

『では、私が拾いましょう』

頭の中に声が響き、温かいものに包まれた。少女は目を丸くし、

デュローであつた美しい青年を見つめる。青年はふわりと微笑んだ。

「今日から、私が貴方の家族です」

1話 始まりの時

大陸で最も栄える国、アルファン王国。この国には太古からの先住民、“魔技人”^{マジビト}が住む。

魔技人は、元は異なる名で呼ばれていたに違いないが、魔技と呼ばれる術を使う事からそう呼ばれるようになった。

魔技人の街はクリメールといい、王国南東部の谷間にある。ここは彼らにとって唯一残された故郷であり、たとえ王族といえど人間は許可なく立ち入る事は許されない。

アルファン王国内でただ一つ自治が認められている地で、彼らはひっそりと暮らしていた。

「この国はもう、ダメかもしれんな……」

長老が漏らしたつぶやきに、ロディウスは黙って目を伏せた。

今、どの国も世界的な飢饉に悩まされている。クリメールは魔技によって被害はないのだが、アルファン王国の民はそうもいかない。

王はなぜ何の手も打たないのだろうか。国庫にはこういう非常時のための食料が保管されているはずだ。

不思議に思いつつも、一方で何もできない自分に歯痒さも感じていた。

魔技人は、長の命令が絶対である。しかし、現在長は不在なのだ。命令がない限り、人間のために動いてはならない。まして、アルファンの民は。



その昔、魔技人達はアルファン王と盟約を交わした。アルファン王国の王が常に善き王であるように、監視者の役目を。そして、王家から要請があった場合には応えなければならぬ、と。

引き換えに、このクリメールという安住の地を得た。ここだけは王の権力が及ばない。

盟約には“要請があった場合”とある。逆に、要請がなければ動いてはならないのだ。

これは、当時の王が便利な力に頼り切ってはならないと決めたものだった。もし長の命令があればこの盟約を無視してでも助けに行くのだが、それがない以上黙って傍観するしかない。

アルファン王家には、もう一つ問題があった。王位継承者が一人しかないという事だ。

これが他の王国であれば争い事が起きずに済むため、万々歳である。だが、アルファン王国に限ってはそうではなかった。

アルファン王国の王族には、王の子であれば年齢、性別を問わず平等に継承権が与えられる。これは、ある特殊な王の選び方から来るものだった。

数百年前、アルファン王は魔技人だけでなく、聖獣とも盟約を交わした。彼らの住処を聖域とし、決して荒らさぬ代わりに王国の守護と選定者の役目を、と。

すなわち、この国の王を定めるのは聖獣。そして、無理矢理退位させる権限を持つのは魔技人。この制度によって、アルファン王国は善き時代が続いた。

その長い歴史の中でも、後継者が一人というのは前例のない事である。

と言っても、元々王位継承権を持つ子供は六人いた。正妃の子が三人と、側室の子が三人。しかし、十年前から少しずつ消えているのである。子供も、妃も。

最初は正妃の真ん中の姫だった。次に、側室の王子二人とその母親。そして正妃の王子と末の姫。正妃は三年前に亡くなったという。

残ったのは王子一人と、その母親である側室。周囲の者は側室の

仕業であると信じて疑わなかったが、証拠を掴む事はならなかった。さすがに手にかけるのは難しかったのか、正妃は毒などではなく心労から来る病だったそうだ。

魔技人は魔技を使用し、常に王都を、王家を監視している。現在は、王を降ろすべきかどうかを検討中だった。

王は正妃が亡くなってからというものの、表に全く出なくなった。政治にも関心を示さず、臣下や側室が好き勝手にやっているような状態。

ロディウス個人としては正妃を深く愛してくれた事を嬉しく思うが、だからといって責務を放棄していいはずがない。普通なら速やかに退位していただくところだ。

が、後継者の王子が何とも頼りないのである。このまま即位しては、母親や臣下にいいように操られかねない。そんな事になれば、今より状況が悪化する事は目に見えている。

それで、王を降ろすべきか否か、という問題が発生したのである。

魔技人は長がいなければ、無駄に力があるだけの烏合の衆だ。今回の事で、それを甚く痛感した。魔技人達としては、側室に実権を握らせるのは非常に不本意だ。アルファス王の正妃は彼らの長の娘だったのだから。

そうは言っても、このまま放置しておくわけにもいかないのが現

実である。

ロディウスは考えをまとめると、長老を真つすぐに見て言った。

「私は、聖獣達を訪ねてみようと思います」

この数年間、考え抜いて出した結論だ。この問題、選定者たる彼らの話も聞いておきたい。

「どうやって聖域へ入る？彼らの聖域へは、許可がなくては立ち入る事ができない」

九十過ぎの老人とは思えぬ声で、長老は言った。

「どうやってでも。それ以上の上策はありますか？」

ロディウスの問いに、長老はうなる。それが解決につながるとは限らないが、迂闊に王を降ろすわけにも、また降ろさないわけにもいかない現状としては、知恵ある者に助力を願うのが正しいだろう。

「では、行って参ります」

長老の考えを正確に読み取って、ロディウスは身をひるがえした。

2話 ユーラテの森

やわらかく美しい金髪の少女は、水盤を覗きながら深いため息をついた。

「ダメですねえ……」

「やっぱりそうですか」

隣に立つ青年が言う。

銀髪が陽の光を反射し、キラキラと輝いた。金の瞳は、聖獣特有のものだ。

彼は“ユーラテの森”に住む聖獣、デュローであった。

「アルファン王国は悪くなる一方です。キャンベル帝国やペラルダ皇国は回復しつつあるというのに」

キャンベル帝国はこの大陸において最も大きく、大陸の半分を占める。その更に半分がペラルダ皇国で、アルファン王国は歴史こそ古いものの大きさは四分の一にも満たない。

大きい国は細部まで管理が行き届かない事が多く、小さい国ほど政治はしやすい。だが、飢饉からの立ち直りが早い二国は王に恵まれたようだ。

尤も、アルファン王国が善き王に恵まれなかったわけではない。

聖獣が選ばれただけあって、最初の頃は善政を敷いていた。王が変わったのは、子供達がいなくなってから。更に言えば、王妃が亡くなってからだ。

原因は、現在唯一残った王子の母アレーナにあると言える。そして、王に女を見る目がなかったという事だろう。

「アレーナのやりたい放題ですね。ルゼンスも、ウォルドの子孫とは思えない不甲斐無さですよ」

ルゼンスは現国王、ウォルドは聖獣や魔技人と盟約を交わした数百年前の王だ。聖獣とはいえ、一国の王を呼び捨てにする感覚に慣れない少女——リューシャは苦笑いを返した。

人間ではない彼らは、何千年も生きているという話だ。数多くの人間と会ったが、その中でもウォルド王は忘れられない存在らしい。良い意味でも、悪い意味でも。どんな人だったのかは、夢を壊したくないと言って教えてくれなかったのだが。

「さすがにマズイですよねえ……。平民の中には餓死者も出てきましたよ。今までこんな事はなかったのに」

リューシャはもう一度ため息を漏らしつつ、水盤を手にした。入っていた水を池へと流し込む。二人がいるのは池の真ん中で、石の机と椅子のみがある建物だ。デュローがお茶を楽しむために建てた建物らしい。

「さて、戻りましょうか」

戻るといふのは、森の中にある小さな小屋だ。本性は大きな銀狼に鋭い角、白い翼の生えた姿であるデュローは、本来家など必要ない。

しかし変わり者の彼は、お茶や軽い食事を楽しむのが好きだった。そのため、人型でいる事が多いのだ。ことにリューシャを拾ってからは、一日の内の大半を青年の姿で過ごすようになった。

リューシャは空になった水盤を手にはちあがり、デュローの後に続いた。石橋を渡り終わると、前を歩いていたはずのデュローにぶつかって立ち止まる。

「レゼル？」

彼が数少ない親しい者にのみ教える名を呼びながら、小首を傾げて見上げた。そのかわいらしい仕草に笑みを浮かべながら、レゼルは答えた。

「誰かが入って来たようです」

「聖域に？」

聖域へ入る事は、たとえ王族でも許されない。アルファン王国の国民ならば、小さな子供でも知っている常識だ。

もし立ち入れば、二度と帰らないと言われている。実際は余程の無礼でもない限り、記憶を消して帰しているのだが。

「他国の方でしょうか」

四年くらい前に、聖域だと知らずに入って来た旅人がいた。また、そういう人が来たのだろうか、と尋ねるが、レゼルは首を振った。

「違いますね。魔技人のようです」

「魔技人？」

それならば尚更、聖域に入って来るはずがない。聖獣は、魔技人よりも古くからこの地にいた。知恵があり、力があり、魔技も使える彼らは、魔技人にとって信仰の対象である。姿を見る事ですら恐れ多く、住処に立ち入るなど言語両断だ。

「まあ、この非常時ですからね」

何のために来たのかは、大方予想できる。

「会いますか？」

平静を装っているが、内心では会いたくてたまらないはずである少女を見て笑いをこらえ、レゼルは頷いた。

「そうですね。会わないわけにもいかないでしょう。私は小屋でお茶の用意でもしていますから、迎えに行って差し上げなさい」

「はい」

リューシャは嬉しそうに返事を返し、レゼルに教えられた方向へ走って行った。その背中を見送ってから、レゼルも歩き始める。

「さて、どのお茶がいいでしょうかねえ……」

3話 生き残りの姫

森の入り口へ向かっていたリユーシャは、ふと思い立って足を止めた。

周囲に誰もいない事を確認し、小さく手を動かす。すると、急に体が軽くなった。移動補助の魔法だ。

自らの魔法に満足したりユーシャは、軽い足取りで“侵入者”を探しに行った。

魔技人が使う魔技は、大きく分けると三種類になる。

まずは魔法。補助的な役割をするもので、回復魔法もこれに当たる。街の結界などもそうだ。また、水晶に魔力を注ぐ事で魔法石と呼ばれる石に変化する。魔法石は魔技人でなくても使えるため街灯などにも使用されていて、生活に欠かせないものだ。

攻撃に特化したものは魔術という。火、水、天、地、無の五属性があり、無属性というのは例えば毒のようなものだ。魔法のように水晶に力を込める事はできないが火種にするなど、普段は生活に利用する者も多い。

この二つは利用する魔力の種類が違うため、基本的に両方操る事はできないと言われている。だが、ごく稀にいるのだ。魔法と魔術

を操る天才が。

魔法を使う者を魔法師、魔術を使う者を魔術師と言うのだが、その天才は魔導師と呼ばれる。そして、魔導師が使う魔技を、魔導と呼ぶのだ。

魔導は魔技人達の憧れで、あまりに操れる者が少なすぎて伝説にまでなっている。魔法と魔術を合わせたものだと言いが、実際のところは不明だった。

魔技は魔技人にしか操れないものだと思われがちだが、実際は違う。魔力さえあれば誰でも使えるし、全ての生き物は魔力を持って生まれるため、普通の人間でも扱えるはずなのだ。……理屈では。

ただ、普通の人間は魔力が足りないのだ。だから、魔技人のようにはできない。もしかすると魔技人と同じだけの魔力を持つ人間もいるのかもしれないが、本人が使えないものと思い込んでいて発揮する機会がないのが現状だった。

そしてあまり知られていないが、聖獣達は魔導を使えるのだ。魔技人が聖獣を崇めるのはこんなところにある。

賢王と言われたウォルド王の時代か、あるいは数代後ならば知られていたのかもしれないが、現在では時と共に忘れ去られた記憶だった。

しばらく行くと、人の気配が漂って来た。慣れない他の人間、しかも自分と同じ魔技人にリユーシャは少し緊張する。

相手もこちらに気付いたようだ。警戒するように歩みが遅くなる。

リユーシャはすぐに出ていくべきか迷った。今まで気が付かなかったが、聖域の森に魔技人の少女がいるのは不自然である。自分の事をどう説明れば良いのだろう。

そんな事を考えている間に、向こうから歩いて来た青年とバッタリ会ってしまった。せめて隠れて考えるなりすれば良かったのに、自分の迂闊さにリユーシャは苦笑する。

現れた青年は、目が眩むような美形だった。焦げ茶色の髪に灰色の瞳という地味な色合いだが、それがかえって生来の美貌を引き立てている。体つきは太っても痩せてもいない。ただ、肌が白いために弱々しくも見えた。が、それはあくまで同年代の働く青年を基準にして考えた場合で、魔技人としてはむしろ黒い方に入るだろう。何をするにも魔技を使うため、肉体労働はしないのだ。

対する青年も、リユーシャの繊細な美しさに感嘆を覚えていた。ここにいる時点でまず大人しいタイプでもないだろうに、ガラス細工のような繊細さは何なのだろうか。魔力の量と外見は比例するため美形の多い魔技人でも、ここまでの美女は見た事がなかった。癖のある髪はオレンジに近い金髪で、はちみつ色の瞳と見事に調和している……。

そこまで考えて、青年の思考は提出停止する。

金髪にはちみつ色の瞳……？しかも、この美貌。歳を考えても……。

導き出すされた答えに、青年はすぐさま膝を折った。信じがたい事だか、間違いない。

「リューシャ・セナ・アルファン殿下……！」

それは、十年前に失ったはずの姫だった。正妃が産んだ第一王女。

金の髪は、王家の証。はちみつ色の瞳は、彼女の母と同じもの――。

「頭を上げてください」

リューシャは困ったように言った。ずっとこの聖域で暮らしていたので、自分の身分を知っていたとしてもあまり実感がなかったのだ。森に来る以前の記憶は曖昧だし。

だから、戸惑いしか感じなかった。

促されて立ち上がった青年は、もう一度軽く礼をした。

「私はロディウスと申します」

普通、名前だけを名乗るのは不敬に当たる。だが、魔技人ファミリーネームに名字など存在しなかった。王妃の娘なら、当然知っているだろう。

ロディウスは動悸を抑え、気付かれないよう深呼吸した。

王妃——ローサの子供が生きていた。

その事実、魔技人にとって二重の意味で喜ばしい事だった。

ローサという女性は、クリメールに生まれながら魔技の才が全くと言っていいほどなかった。なまじ長の一人娘であったばかりに、周囲の失望の色は濃い。

それを敏感に感じながらも気丈にふるまっていた所へ、弟誕生日が告げられる。

彼女はそれを聞くと、自分の居場所は無くなったと村を出のだ。

しかし、生まれた子供は二歳で儚く散ってしまった。産後体調を崩していた長も、同時期に亡くなる。

その頃既に王妃となっていた彼女を呼び返せるはずもなく、そもそも追い出したも同然という自覚のあった街の者達は、三人の子供ができたと知っても連絡を取る事を躊躇した。

そんな時、王子や王女が次々と命を落とす事件があったのだ。

王国と魔技人の未来は閉ざされたかのように思えたが——。

リューシャの存在は、ロディウス、そして魔技人にとって、まさに天からの救いの手であった。

そんな彼の心の内を知らないリユーシャは、のんびりと言った。

「一度、魔技人にお会いしてみたかったですよ。私の事はリユーシャでかまいません。どうか、普通に話してください」

「しかし……」

そういう訳にもいかないとロディウスが言いかけると、故意なのか天然なのか、リユーシャは悲しそうに目を伏せた。

「そうですか、すみません。私には聖獣以外に知り合いがいませんでしたから、親しく話せたらと思ったのですが……」

かわいらしい仕草に、ロディウスは言葉につまった。もし計算であるのなら恐ろしい。

「わかった。呼び方は無理だが、話し方は人前でなければ」

「本当ですか!？」

破顔するリユーシャはよりいっそう愛らしく、ロディウスは先ほどとはまた違った意味で動悸が激しくなるのを感じたのだった。

3話 生き残りの姫（後書き）

リューシャは切れ者だけど天然です。

次回、レゼルが過保護ぶりを発揮する予定。

4話 過保護な聖獣

とりあえず小屋まで戻って来たリューシャとロディウスは、自然なほど笑顔のレゼルに出迎えられた。

自分の家へ土足で上がられたようなものだから、怒るのが普通ではないか？

心の広い聖獣なのだろうか。

進んで怒られたいわけではないので、ロディウスは深く考えなかった。

しかし、リューシャはこれはまずい、と思った。理由はわからないが、別れた時より怒っている。あの時も相当なものだったが、それ以上のオーラがにじみ出ていた。

ちなみに、このオーラはリューシャと他の聖獣にしかわからない。

そうとも知らず、ロディウスは口を開く。

「はじめまして、ロディウスといいます」

「知っていますよ。先ほどまで見て《・・》いましたから」

レゼルはにっこりと笑う。

「私の事は好きに呼んでください。ああ、レゼルという名だけは使わないでいただけると諸手を挙げて喜びます」

さすがに歓迎されていないとわかったロディウスは、ひきつった笑みを返す。悪い事をしたという自覚はあるが、何かこう、別の理由もある気がする。

「レゼル、侵入者とはいえお客様ですよ。ずっとここで話しているつもりですか」

見かねたリューシャが口をはさむと、レゼルは素直に頷いた。

「そうでしたね。立ち話め何ですから、中へ入りましょう」



小屋は聖獣と一国の姫が住むには小さく質素な造りだった。ロディウスはそう思ったが、リューシャ達にしてみればこれで十分だ。客が来る事なんて滅多にないし。

「用意はしてありますから、お茶を入れてもらえますか」

レゼルの言葉に、リユーシャは頷いて小さなキッチンに入っていた。

慌てて止めようとしたロディウスは、殺気にも似た凍るような視線を感じて口を閉じる。

「リユーシャの事は他言無用でお願いしますね？」

背後に黒いオーラが見えるのは気のせいだろうか。……気のせいであってほしい。

レゼルはリユーシャに前もって注意しなかったのを後悔していた。

アルファン王国において金髪は王族の証。平民どころか、貴族であつても金髪はありえない。また、政略結婚などで違う血が混ざつた場合、三代目までしか金髪の子供は生まれなかった。

ゆえに金髪はアルファン王家の血縁である証明書であり、王位継承者としての第一条件だった。

加えて滅多にいない薄いオレンジ、つまり、はちみつ色の瞳。幻術で隠すように言うべきだったのだ。

「なぜです？今の王国の状況はあなたもご存知ですよ？リユーシャ殿下がおられれば、あの女の思い通りにはなりません」

冷や汗と震える体を押さえながら、悟られないように話す。

他の魔技人ならば素直に頷いただろうが、生憎とロディウスは変わり者で、信仰心が薄かった。だからこそ聖獣に会うなんていう非常識な事を思い付いたのである。

しかし、もしもレゼル以外の聖獣の所へ行っていたら。

まず間違いなく息をしていなかっただろう。

いや、正確に言えば“この森にリューシャがいなければ”彼は死んでいた。

聖獣達にしてみれば、数百年前の盟約を破られた——尤も、魔技人との間に交わされたわけではないのだが————そうでなくとも自分の住処に無断で入られたというのに、なぜ生かして返す必要があるのか。

ロディウスはいわば不法侵入をしたのだ。罰として首を噛みちぎられても文句は言えまい。まして、話を聞いてやるなど言語道断である。

ロディウスにとって幸運だったのは、リューシャの身分でも血筋でもなくその“存在”だ。

十年前、レゼルは一目見てリューシャを気に入った。外見、魔力の量はもちろん纏う雰囲気だ。

だから、彼女には血を見せたくはない。力を持つ以上、いずれ見る事になろうとも。

それは、他の聖獣達も同様の願い。

故に、ロディウスの発言はレゼルを苛立たせるのに十分だった。

もしレゼルでなければ一秒の間も置かず、彼の首は空を舞ったに違いないが。

「ダメなものはダメです」

尋常でない殺気を放つ。

「では、クリメールへ……」

ロディウスは言いかけたが、威圧するような微笑を見て口をつぐんだ。

「彼女がそう望むのならいいでしょう。しかし、なぜ今言うのですか？彼女がいない時に」

王位継承権を持つ者として名乗りを上げるのは反対だが、魔技人の長になる事はかまわない。リユーシャがそれでいいのなら。

それに。

「魔技人はアルファン王国に住んでいますが、立場的には中立でしょう。なぜそこまでするんです？」

大きい力を持つために、魔技人はどの国にも属していない。

ローサの件は、力を持たない魔技人であったために問題にならなかった。が、リューシャは並々ならぬ力を持っている。国の事に深く関わるべきではない。

ロディウスにわからないはずがないのだ。

どちらも沈黙したまま数分が過ぎ、リューシャがお茶を持って入って来た。

「どうしたんですか。お二人共」

その場に漂う形容しがたい雰囲気、リューシャが首を傾げる。

「何でもありませんよ」

そう返すレゼルの目は、愛おしい少女を映す。先ほどのやり取りが嘘のように、優しい空気を纏っていた。

「それならいいのですが」

深く突っ込むつもりはないらしく、お盆に乗せたカップをそれぞれ

れの前に置く。

「タタラソウのお茶なんですよ。ほどよい苦みがおいしいんです」

リユーシヤはにっこりと説明する。

「タタラソウ？」

「はい。わりとどこでも採れるハーブの一種です。街道のはしっこに生えている事もあるそうですよ」

森から出る事は滅多にないため知識として知っているだけだが、リユーシヤはスラスラと答えた。

「スツキリしてて飲みやすいですね」

「そうでしょう？二日酔いにも効くのよ」

「まさか、そんなに飲んだ事があるんですか？」

「ちょ、ちょっとだけなら……本に書いてあっただけですよ」

取り繕うように笑う。

「いけませんよ。酒は飲み過ぎると危険です。お体は大事になさってください」

王家の姫で、長の血を引く唯一の娘だから。

ただの娘ではないからだと言われた気がして、リユーシャは悲しげな笑みを浮かべた。

ロディウスは何か言いかけて、急激に襲って来た眠気にさらわれてしまった。

「中に入っていたのはマカの根ですか？」

リユーシャはカップを片付けながら言った。ロディウスをベッドに運び終えたレゼルは、さも疲れたというように獣の姿で寝そべる。

『丁度池から帰る途中に生えていたので入れてみました』

入れてみましたで済む問題ではないのだが、リユーシャはなるほど、と頷いた。

「違う匂いが混ざっているのはわかったのですが、マカの根でしたか」

タタラソウの匂いで特定できなかった。

『まあ、タタラソウのお茶にしたのはそれが狙いですからね。彼には違うものが混ざっている事もわからなかったでしょう』

タタラソウは香りが強い。普通の人間にわかるはずがない。

リユーシャは新しいお茶を入れて椅子に座った。さっき入れたも

のを飲んだのはロディウスだけだ。

尤も、リューシャもレゼルも毒物は効かないのだが。

危険に気付けるかのテストでもあったのだ。もちろん不合格。：

…今のところは。

今頃、ロディウスはどんな夢を見ているのだろうか。

4話 過保護な聖獣（後書き）

もっと過保護っぷりを発揮させたかったのですが、今回はそれほどでもなくなっていました。また次の機会に。

ちなみに、念のために書いておきますが、魔技人は人間ですよ。人間の中で魔技が使える一族。それが魔技人です。

5話 ドラゴンの王、セザン

マカとは、鎮痛作用のある薬草の一種である。タタラソウと同じくどこでも採れる草だ。

ただ、公にはされていないのだが、マカの根には麻薬のような作用がある。それを口にした者に夢を見せるのだ。分量を誤れば二度と目を覚まさない。

そのマカの根を飲まされたロディウスは、ベッドの上で寝息をたてていた。

「しかし、何のためにマカの根を？」

リューシャは人型に戻って向かいに座るレゼルに尋ねた。彼のする事が間違っているとは思わないが、気になるものは気になる。

「信用できるかどうか探るためです」

「ああ、覗くんですか」

納得したように頷く。

「それもそうなのですが、ちょっとした試練を受けてもらおうと思っ
いまして」

「試練ですか？」

「ええ」

どうやらそれ以上は言う気がないらしく、空になったカップを持つて立ち上がった。

ロディウスが眠りについてから三日が経った。レゼルはロディウスの寝ている部屋にこもりっきりである。

いつものように森から食べられそうな木の実や果実を採って来た帰り、リユーシャは視界が暗くなったのに気づいて顔を上げた。

「リユーシャ！元気にしてたか？」

それ《・・》は人間の少年へと姿を変え、屈託なく笑った。黒髪に金の瞳、外見は十四歳くらいだ。

そう、外見は《・・》。

「セザン、お久しぶりです」

「ああ。ちょっと見ないうちに大きくなったな！」

「セザンはお変わりないようで」「ん？外見なら成長させられるぞ」

「いえ、そういう意味ではなく」

気心の知れた相手に、リユーシャの頬も緩む。聖獣相手であるために、敬語はそのままだったが。

「レゼルは中か？」

「はい。特に何もしなければ出てくると思います」

この森の主であるレゼルはセザンが来た事に気付いているはずだ。

「何もしなければ？」

「今お客さんが来ておりまして」

「確かに妙な気配を感じるな。これは……魔技人か？」

セザンの問いに、リユーシャは三日間の事を簡単に話した。

「あゝなるほど。今の王を降ろすべきかどうか意見を聞きに来たところ、死んだはずの姫に会って興奮し、レゼルの不興を買った、と」

「そうなんですか？」

頭が悪いわけではないのだが、自分に向けられる感情には疎いリユーシャだ。セザンは苦笑して頷く。

「話を聞いた感じだと、オレとも気が合いそうにないな」

「ロディウスはいい人だと思いますよ？」

侵入者ではあるが。

「まずそこ。それが気に食わん」

「それって？」

何かマイナスイメージにつながるような事を言っただろうか。

「いや、何でもない」

セザンは誤魔化すように言うと、小屋の方へ足を向けた。



ロディウスは相変わらず目を覚まさないらしい。

二人が小屋へ入るとレゼルが二階から下りて来た。やはり、気付いていたのだろう。セザンを見ても全く驚かなかった。

「で、どうするんだ？レゼル。実際、放っておくわけにもいかんだろう。ウォルドに頼まれたしな」

正直、セザンにとってはアルファン王国がどうなろうと知った事

ではない。他の聖獣も同様だ。ただ、ワールドに頼まれた。そして、リューシャも無関係ではないという事だけが、彼らの動く動機となる。

「そうですね……」

考え込んだレゼルに、リューシャはふと思った事を口にする。

「私が城にいたのは六歳までですが……そもそも、トア———今はオレックでしたっけ———義兄様はお優しい方でしたよ。民を蔑ろにするような事はないと思います」

確かに母親はすごい性格をしていたが。何度睨まれた事か。

「ふむ……では、オレックの性格が変わっていなければ、問題なのはアレーナだけですか」

「その“優しい性格”がダメなのかもしれないけどな。後、甘い汁を吸いまくってる官僚も一掃すべきだろう」

「ええ、もちろんです。とりあえず、様子を見に行くべきですね。魔導で見るより直接の方がいいでしょう」

頷き合う二人にお茶のおかわりを入れ、リューシャは尋ねた。

「ロディウスはどうするのですか？」

「ん、どうしょっか？」

「明日までに目が覚めたら連れて行きましょう」

ロディウスは、その日の午後に目を覚ました。致死量ではなかったが、リユーシャは胸をなでおろす。

「あら、ロディウス。顔が赤いですが……」

「い、いや、何でも……」

「熱があるのではないですか？」

「な、ない！ ないから！」

レゼルとセザンがいて、しかも尋常じゃないほどに睨まれているにも関わらずロディウスは敬語を使う余裕がないようだ。

「やっぱりおかしいですよ。念のため診ますから、部屋に来てください」

「大丈夫だから！ ！」

なぜか全力で拒否するロディウス。

首を傾げつつ、リユーシャはそれ以上言わなかった。



「そういえばこの頃シェーラやアジェと会っていませんが、お元気ですか？」

シェーラもアジェも、レゼル達同様聖獣だ。レゼルがデュロー、セザンはドラゴン、シェーラはユニコーン、アジェはカロット。

デュローとは銀狼の体に純白の翼、鋭い角を持った獣だ。大きさはリューシャが乗れるくらい。翼を広げればもつとすごいだろう。

ドラゴンは複数存在するが、その王がセザンだった。ドラゴンの王は代々黒い鱗を持つ。聖獣の中では最も体が大きい。

ユニコーンは白馬に角。一角獣とも言う。角は、デュローと比べたら長くて細いのが特徴だ。生えかわると聞いた事がある。

カロットは一見、大きいだけの山猫。変わったところはなく、その辺の魔獣の方が強く見える。もちろん聖獣である以上それだけな訳がない。が、詳しくは不明である。

「オレもあんまり会ってないんだけどな。元気にしてるんじゃないか？」

「そうですね。近々会う事になると思いますが……その時は先に連絡しましょう」

「そんなもんいーって」

「セザンはそれでいいかもしれませんがねえ、迎える側にも都合があるのですよ」

ロディウスは、目の前で聖獣と姫がいる事に内心縮こまりながらスープを口に運んだ。聖獣は食べ物をお口にすることがないため、食事を取っているのはリューシャとロディウスだけだ。このスープは誰が作ったのか……考えるのはやめておこう。

明日城へ向かう話は、リューシャから聞いていた。

始め、リューシャは留守番という事になっていたのだが、頑として譲らなかったので変装する事で妥協している。

リューシャ曰く、幻術で髪や目の色を変えたら問題はないだろうと言う事だ。ロディウスにしてみれば母親そっくりな顔立ちをしているのだが、髪や目が違う色なら大丈夫だろう。……おそらくは。

デュローのみならずドラゴンとも会えて始終恐縮していたロディウスだが、聖獣二匹からは鋭い視線が常に注がれていたのだった。

5話 ドラゴンの王、セザン（後書き）

次回はロディウスの見た夢について。

誤字脱字とか感想があつたらお願いします。

6話 過去（前書き）

主人公不在w

今回はレゼル&ロデウスの話です。

6話 過去

時間は少し^{さかのぼ}遡る。

セザンが来る三日ほど前、レゼルは小さな客室にいた。

この客室は、リューシャの希望でごく稀に訪ねて来るセザンや他の聖獣達のために作られた部屋だった。聖獣達にしてみれば普段のように外で寝たって問題はないのだが、リューシャの前では人型をとっている場合が多いため気になるらしい。

眠る事だけが目的に作られたので、置いてあるのは三つのベッドだけである。

そのベッドの一つに、レゼルにとって目障りでしかない青年が横たわっていた。

今は閉じている目や髪の色はいたって平凡で地味だが、その顔立ちが女達がこぞって媚を売るほど整っている。

とはいえ、聖獣達が人型をとった時に比べれば劣る。

外見の美しさは魔力^{マナ}の多さに比例すると言われている。そのため、普通の人間より魔技人^{マジビト}の方が数段美しい顔をしていた。

魔法や魔術、魔導といった魔技^{マジ}にはランクが存在する。

魔力マナの量と操る技術によって左右されるそれは、下から順に下級、中級、上級、最上級。この中でも最上級は魔導師のみとされ、逆に言えば魔導師は例外なく最上級となる。

魔導を使用できる聖獣は、人間で言うところの“最上級魔導師”。ベッドの上の彼——ロディウスより容姿が美しいのも頷ける。

「さて、どんな夢を見せましょうか」

レゼルはロディウスを感情のない目で見下ろしながらつぶやいた。正確には、感情を押し殺しながら。

魔導を使えば、マカの根で見る夢を操作する事など容易たやすい。自由に覗く事もできる。

目の前にいるコイツは気に入らない。しかし、リユーシャのためにダメにして《……》いいものかどうか……。

レゼルの心は葛藤かつとうの最中さなかにある。

しばらく考えて。

「まずは過去の記憶を見てみましょうか」

眠るロディウスの額に手をかざした。



ロディウスは現在、魔技人^{マジビト}最も優秀な“上級魔術師”である。

それゆえに長が不在の今、王宮の監視の責任者でもあった。

遠く離れた地を見る術、『水鏡』。一見魔法のようにも思えるが、水を媒介に使うため魔術に分類される。

ロディウスは『水鏡』で十数年、ずっと見ていた。王妃ローサとその子供達を。

ローサは魔技人^{マジビト}の長の直系であるにも関わらず、魔力^{マナ}が低かった。いや、彼女が特別低いわけではない。世の中の人間の大半がそうなのだから。

それでも、長唯一の娘に魔技^{マジ}が使えないのは大問題であった。さぞや肩身の狭い思いをしただろう。彼女がクリメルを飛び出した十六歳の時、ロディウスはまだ生まれていない。だから、こればかりは想像でしかなかったが。

クリメルでどれだけ後ろ指をさされようとも、ローサは毅然として生き続けた。明るく笑顔の多い娘だったとは、長老の言葉だ。それでも、心の傷は深いはずだ。

彼女はルゼンス王に会って、初めて安らぎを得たのかもしれない。

ロディウスは強い魔力^{マナ}を生まれつき持っていた。

普通、魔力^{マナ}は体の成長と共に増えてゆく。安定するのは成人である十六歳の頃だ。理由はわかっていないが、おそらく幼い体では耐えきれないためだろう。

当然というべきか、ロディウスは何度も魔力^{マナ}を暴走させた。八歳くらいになるとある程度コントロールできるようになったが、それまでは感情のままに力を振るっては大人にさえ恐れられた。

強すぎる力ゆえに孤立したロディウスは、『水鏡』を使って城を眺めるようになった。

王妃ローサとその三人の子供は毎日を何不自由なく過ごしていた。

ローサは聡明な女性で、その生活が当たり前ではないのだと、時城下町を訪れたり自身の体験を語って聞かせたりしていた。

長男のゼスは王太子として幼い日から武を磨き、両親の期待に答えようと勉強面でも切磋琢磨した。口数は少ないが妹思いの優しい少年である。

長女のセナはおっとりした大人しい少女だった。人形よりも生きた動物を好み、美しい自然を愛した少女。勘が強いのか、時々視線が合う事もあった。

次女のリサは姉と違い、勝気でおてんば。馬は大きすぎてまだ自分で乗る事はできなかったが、立派な鬣たてがみにうっとりするという変わり者でもある。

彼らを見るたびに、ロディウスの心は軽くなる気がした。

ところが今から約十年前、セナが消えた。ローサ曰く、盗賊らしき男達に襲われたのだそうだ。実際ローサの服はボロボロで、髪も乱れていた。

その後側室の王子二人の行方もわからなくなり、ついにゼスとりサも姿を見られなくなった。

ローサと王の嘆きようといったら！

ロディウスは今でも鮮明に覚えている。

一週間近く部屋に閉じこもり、出てきた時は痩せこけて別人のようだった。目は虚ろで何も映してはいない。少女のようであったローサは、一気に老けたように見えた。

王は立场上平静を装っていたが、眠れない夜が続いているらしく、その疲労は隠しきれないものになっていた。

ロディウスはそんな二人を後悔の念と共に見ていた。

自分がきちんと見ていたら。

なぜか、三人の王子や姫の行方が掴めないのだ。肝心な時に役立たない力に、苛立ちを募らせた。



真っ白な空間に過去の光景が浮かんでは消え、ロディウスは苦い笑みを浮かべた。

セナ様——リユーシャ・セナ・アルファン殿下が生きていたからよかったものの……。

他の王子達も生きているのではないか、という考えが頭を過り、すぐに振り払うように頭を振った。

期待はしない方がいい。

あれから大分経って、表面上はクルメールの人々とも普通に話せるようになったが、彼らの怯えは簡単にわかった。

同胞達は目を合わせようとしなない。まだロディウスを、その力を恐れている。

完璧に掌握した今であるからこそ、怒りを買う事を恐れている。

まともに話せるのは長老のみだったが、ロディウスは気にしなかった。ローサの子供達を探す事だけが彼の生きる理由であったのだ。

少なくとも一人、見つけた――――。

幼少の頃、両親や兄弟でさえ彼を恐れ、腫れもののように扱った。

だからこそ、理想の家族であったルゼンス夫妻とその子供達を離れ離れにしたアレーナ――――現王太子オレックの母を許しはしない。

6話 過去（後書き）

長くなったので切ります。

今回は夢で過去の記憶を見ている感じ。

7話 ローサ（前書き）

テスト期間中ですが、妙に筆が進んだので投稿します。
……現実逃避ですかね。

7話 ローサ

レゼルは形の良い眉をひそめ、睨むような目付きでロディウスを見た。

「全て自分のエゴではないですか。リューシャの気持ちなど考えもしないで」

ロディウスが眠り始めてから一日が経っていたが、食事の必要のないレゼルは気にせず座っている。

少し考えると、レゼルは再び手をかざした。



夢を見た。

一つではない。たくさんの夢だ。

その夢の一つ一つに悪意がこもっていたのは、気のせいだろうか。

魔術が使えなくなったり。

見えない何かに追われたり。

ロディウスには嫌な事などごくわずかしかないが、そのわずかを突いてくる。

その中でも一番キツかったのは、国王夫妻とその子供達の夢だった――。



その夢は、最初は幸せな夢だったのだ。だが、途中からロディウスが考えもしなかった展開を見せた。

憎きアレーナによってバラバラにされたローサの子供達は、全員生きていた。

ゼスこと長男であり正しい王太子のヴァイスティア・ゼス・アルファン殿下。

セナこと聖獣に育てられたリュウシャ・セナ・アルファン殿下。

そしてリサこと最もマイペースなファルナ・リサ・アルファン殿

下。

様々な偶然が重なって、三人は再会する。

城へ戻り父王に会い、アレーナと現王太子オレックを断罪。

ローサはいないものの、本来あるはずだった平和な生活が始まる
――はずだった。

おかしい、と思ったのはどの辺りからだったのだろうか。

もしかすると、ロディウスが気付かなかっただけで最初から彼女達の様子はおかしかったのかもしれない。

アレーナとオレック、甘い汁を吸っていた貴族共を断罪した時、誰一人として笑みを浮かべなかった。それどころか全ての感情を押し殺したような無表情で、何かを必死に我慢しているようにも見える。

見ていただけだったロディウスがこんなにも歓喜したのに。

幸せな日々の中で、彼らは時折悲しそうな表情をする。

一体何を想っているのだろうか。

ロディウスにとって、アレーナは憎き存在。その息子であり、まんまと王太子の座についたオレックも同様だ。

しかし、彼女達にとっては違うのだろうか。

ロディウスの夢は三人が城に戻り、オレックなどではなく正統な継承者が王座を継ぐ事だ。もちろん、彼女達が幸せであるのは言うまでもなく。

家族のいないロディウスは、きちんと向き合ってくれる家族がいる時間こそ、最高に幸せな時だった。彼の家族にはそういった事が期待できないため、そのあこがれはもはや執着とも言える。

ロディウスのような家族でない限り、家族一緒に住むのが幸せ。

そう思っていた。

けれども。

よく考えれば、彼女達にとってはアレーナやオレックも家族なのだ。

どんなに酷い目に合っても、彼女達の心が痛まないはずはない。



「やれやれ、少しはマシになりましたか……」

レゼルはため息交じりにつぶやいた。ロディウスの過去を見てから、更に一日が経過している。

「それでもまだ、きちんと理解できていないようですね」

確かに、ロディウスが考えたような事もあるのだろう。だが、それ以前にリューシャは城に戻りたいと思っていない。

生きているならば、家族には会いたい。だが、もし自分のように平穏な暮らしをしていて、それが続く事を望んでいたら？自分が行く事で兄や妹の大切なものを壊してしまわないだろうか。

……というのがリューシャの思考である。

約十年共に暮らしてきたレゼルには、聞かなくとも手に取るようにわかった。

十年——……もう、城で過ごした時間よりも、この森で過ごした時間の方が長いのだ。しかも、幼かったため覚えていない事も多い。どちらに思い入れはあるかと問われれば、よほど欲深い人間でないかぎり後者を選ぶだろう。

ロディウスは自分の理想に囚われるあまり、リューシャの本心を全く考えていない。レゼルにとっては、それだけで許せない。

「リューシャに付いて来る気なら、きちんと相手を想いやって行動

してほしいものですねえ……」

リューシャ限定でしかそれを行えない人（獣）に言われたくはないだろうが、つつこむ人もおらず、レゼルは深々とため息をついた。



「ここは……」

目を覚ましたロディウスは、木で造られた気分の落ち着く部屋を見て、眠る前の事を思い出した。辺りには誰もおらず、ベッドしかないためえらく殺風景だ。

突然風が吹き、思わず目をつむった。ロディウスが次に目を開いた時、そこにいたのは水鏡で見た姿そのままのローサだった。

「ローサ……様」

「ロディウス、といったかしら」

ローサはにっこりと笑って口を開いた。ロディウスが驚いて目を見開き、次いで細めた時。

「私の娘は人間よ」

突然言われた当たり前の事に、ロディウスの思考が停止した。

「リユーシャは……もちろん他の二人も、あなたの想像上の生き物ではないわ。本人の意思がある。そのところ、わかっているかしら？」

「それは当然……」

言いかけてロディウスは口をつぐんだ。

「あなたはリユーシャの考えを聞かなかった。……気付いたかしら？」

「……はい」

ロディウスは城に戻る事がリユーシャの幸せであり、彼女の望む事なのだと思っていた。今もそう思っているが——ローサの口調からすると違ふのだろうか。

「自分の考えを他人に押し付けるのは良くないわ。他人が自分と同じである事が当然だと思ふ事も」

それは理解できるし、当たり前だ。

「リユーシャは私の子供だというのに、魔力^{マナ}が多いの。きっと先祖返りなのだろうけど……その割に、周りに魔技人がいなかったせいで魔技の訓練を受けていない。ロディウス、リユーシャを頼むわ」

「はい、もちろんです」

ロディウスが返すと、ローサはまるで少女のように笑った。

思わずみとれるロディウスに気付く様子もなく、ローサは言う。

「よかったわ。あなたは強いから、安心できる。私はただ、見ている事しかできないから……」

悲しそうに微笑み、そして窓の方を見やる。ベッドに上半身を起こして座っているロディウスには見えないのだが、その視線の先にはリューシャがいた。

「ローサ様」

ロディウスが呼ぶと、ローサはどうしたの、という風にこちらを向いた。

まだ少しだるいものの、十分に動く体をベッドの外へ押しやって両膝をつく。つま先は立て、袖口に手を入れて頭を下げる。片膝をついて右手を胸につける騎士とは少し違った、これが魔技師や文官の礼のとり方だ。

「私、ロディウス・フォレーンハリューシャ・セナ・アルファン殿下に仕え、できる限りの助けとなる事を聖獣に誓います」

その言葉に、ローサはありがとう、と返した先ほどよりも。安心しているように見えるのは見間違えではないだろう。

魔技人は“言葉”をととても大事にする。彼らが嘘をつく事は絶対にない。神同然に崇める聖獣に誓うというのも、特別な意味を持っていた。たとえその誓いが娘のためではなく自分のためだとしても、ホツとせずにはいられなかったようだ。

頭を上げたロディウスは、その場に誰もいなくとも全く取り乱さなかった。

しばらくしてレゼルが帰ってきた時、ロディウスはベッドに腰かけて俯いていた。何か考え事をしていたらしい。

「……おや、どなたかいらっしゃったのですか」

そこに残った魔力^{マナ}の残滓を読み取って、レゼルは首を傾げた。ロディウスが答える前に、ああ、と呟く。

「ローサですか」

彼女が現れたのは初めてではない。魔力^{マナ}が少ない分敏感だったローサは、死んだ後も色々と“感じる”事ができるらしい。

「起きたのなら丁度良いです。これを飲んでください」

レゼルに差し出されたものはとても薬とは思えないグロテスクな色をしていたが、聖獣に言われて飲めないはずがない。鼻をつまんで一気に飲み干した。

「あなたは、ローサが好きなのですか」

唐突な問いに、ロディウスは心臓が止まりそうになった。いや、問いではなく確認だろうか。

「なっ……何を……っ!？」

「心を読む事など容易いです。まあ、ローサはリューシャにそっくりでかわいらしいですからね」

逆だろう、とは思うが、つつこむような余裕はない。

「明日王都へ向けて出発する事になりました」

上手く動かない頭のままロディウスは頷く。

「いくら似ていてもリューシャには……」

「はっ!？ いや、それは……」

「リューシャに魅力がないと?」

「えっ、いや、あの……」

「用がない限り近付かないでくださいね」

「……あ、えっと、ハイ」

レゼルが余計な事を言ったせいで、ロディウスがローサとリユーシャがそっくりである事を再認識したのは余談である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2783q/>

はちみつ色の姫

2011年5月24日13時31分発行